

偉大な先人達 — 現在・未来へと語り継ぐその功績

さ き ま こう えい
佐喜真 興英 (1893年～1925年)

1893年(明治26年)、宜野湾村新城に生まれる。1908年(明治41年)に沖縄県立第一中学校を首席で卒業し、その後東京帝国大学法学部へ進学。大学卒業後、司法官補・判事として福岡や宮崎、岡山県津山の裁判所に勤務し、そのかわら、民俗・民族学の研究を行った。著作には『南島説話』『シマの話』『女人政治考』があります。しかし、1925年(大正14年)に肺結核のため、31歳7カ月という若さで亡くなりました。死後、日本の民俗学の創始者・柳田国男は「彼の著述は、学界の睡を驚かす警笛の如きものであった。」と、若き興英の死を悼んでいます。



や ま だ し ん ざ ん
山田 真山 (1885年～1977年)

1885年(明治18年)、那覇市壺屋に生まれる。1906年(明治39年)、東京美術学校(現東京芸術大学)に学び、東京で日本画、彫刻、工芸の創作活動を行う。東京では、明治神宮聖徳記念絵画館の『琉球藩設置』など、歴史に残る大作を描き美術界で注目される。1940年(昭和15年)、沖縄に帰り沖縄戦を体験。息子たちを失う。戦後、普天間にアトリエを構えた。全戦没者の追悼と世界平和を希う沖縄の心を一身に担い、晩年の18年間、沖縄平和祈念像の制作に全生涯(1977年没92歳)を捧げました。山田真山画伯の平和祈念像の原型は、普天間のアトリエに今も大事に保管されています。



と う ば ら し げ た
桃原 茂太 (1892年～1955年)

1892年(明治25年)、父桃原正裕(元間切長)の長男として大謝名に生まれました。弟には、桃原亀郎(14代～15代村長)がいます。県立一中卒業後、旧制第五高等学校(熊本)を経て旧制東京帝国大学法学部に進む。卒業後、東洋拓殖(株)へ入社。順調な出世コースをたどり、1934年(昭和9年)、沖縄に帰り、那覇市松山で弁護士を開業。弁護士稼業のかたわら、地元宜野湾村に足を運び村会議員や地域青年団に講演活動を行う。特に産業、経済問題に関心を寄せ、宜野湾村農民道場建設に力を注いだ。1942年(昭和17年)、衆議院議員総選挙に立候補し当選する。以後、議会活動に専念するが昭和19年の十・十空襲で那覇を引き揚げ宜野湾村に戻る。敗戦後は弟、亀郎(一時助役から村長)と宜野湾村の村政復興のため尽力する。1949年(昭和24年)、琉球開運株式会社を創設し、社長に就任。米軍政府の中、本土との架け橋に尽力したが、1955年(昭和30年)2月28日、健康にすぐれず病気で他界。63歳であった。宜野湾出身の初の国会議員。



はごろも伝説

むかし、謝名村に奥間大親という働き者の百姓がいました。奥間大親は毎日仕事が終わると森の川でスキヤクワを洗っていました。その日、いつものように森の川に行くと、見たこともない美しい着物が池のそばの木にかけてありました。奥間大親は、「こんな美しい着物は見たことがない。我が家の家宝にしよう」と、着物を家に持ち帰り、高倉の中にしまいました。再び池に戻ると、そこにはこれまた美しい天女が水浴びをしているではありませんか。奥間大親が木の陰から見てみると、やがて天女は池から上がり、大切な着物がなくて大変困っている様子でした。奥間大親は親切に話しかけ、天女を家に連れて行き、着物を貸してやりました。そのうち二人は夫婦になり、女の子と男の子をもうけました。ある日、泣いている弟を子守っていた姉が、子守歌の中で「そんなに泣くなら、高倉の中にある飛び衣を着せてやらないよ」と歌いました。何気なくそれを聞いていた天女は、長年探し求めていた羽衣が高倉にあることを知り、いてもたってもいられずそれを取り出して着ると、泣く泣く子どもたちを残して、天に帰ってしまいました。残された男の子は、後に中山王・察度となり、中国への進貢貿易を始め、琉球の国づくりの基礎を作りました。この話は、察度王生誕の秘話として、いまに伝えられています。

